

笑顔の可能性

笑顔で患者さんを救うことができる。私がそう思うようになったのはある患者さんからもらった言葉がきっかけだ。そして私はその言葉を大切に自分の軸としている。

ある患者さんとは脳梗塞で入院された A さんで、後遺症に片麻痺がある方だ。A さんは寡黙な方で私が訪室した際も「テレビ見るわ」と言われることも多く、あまりお話をする方ではなかった。私は今までの実習では日々患者さんとコミュニケーションをとっていくことで信頼関係を築いていき、思いや気持ちを傾聴してきた。しかし A さんとはあまりお話をすることができず少し戸惑うこともあった。

あまり会話はできていなかったが私は無理に話をしようとせずに A さんのペースに合わせて関わるようにした。話をしてくれるときは話を聞き、テレビを見たい時は見てもらう。何か思いの表出がしたくなったらいつでも聴いてあげたいと思い、訪室の際や援助の際には明るく笑顔で接するように心がけていた。

他の学生が患者さんの思いを傾聴しその思いに対して何か看護を行っている中、私は日常の援助くらいしか A さんにできておらず、A さんの思いや気持ちを知ることができなかった、みんなみたいに患者さんの気持ちを知ることができなかった、思いに寄り添うことができなかったと思い少し落ち込んでいた。

実習最終日、私のコミュニケーション技術がまだまだだったのかな、と思いながらも A さんのもとへ最後のあいさつに行った。「受け持ちをさせて頂き、ありがとうございました」と伝えると寡黙であり話さなかった A さんが「ありがとう、あんたの笑顔に救われた」と私の目を見てはっきりと言ってくれた。私はそんな言葉をもたらえて思っていなかったのが本当に驚き、同時にその一言が本当に嬉しかった。あまり会話ができなく、思いや気持ちを知ることができていないと思っていたが、会話をすること以外にも患者さんに対してできることはあるのだと感じた。

誰もが思いの表出ができるわけではないし、表出して気持ちが楽になる人もいればそうでない人もいる。思いを聞くことも大事だが寄り添った看護は話を聴くことだけではないのだと感じた。いつも笑顔で接し、患者さんに良い影響を与えたい、少しでも気持ちが明るくなったり気持ちが楽になってもらいたい。私はそのような思いを持って笑顔でいることを心がけてきた。そのような思いが患者さんに通じたのかなと思うととても嬉しく思い、私はその言葉を忘れられないし、大事にしている。

会話だけがコミュニケーションなのではなく、自分の振る舞い、笑顔で患者さんを救うことができるんだ！と信じてこれからも笑顔を忘れずに患者さんに寄り添っていきたい。